

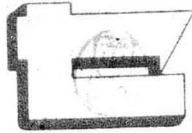
敘事文藝の潮流

岡崎義惠 著

敍事文藝の潮流

生活社 刊

昭和二十四年四月十五日印刷
昭和二十四年四月十日發行



配給元

發行所

印刷者

發行者

著者

敘事文藝の潮流

定價 二五〇圓

株式會社 生活社

岡崎義惠

鐵村眞一

東京都千代田區神田駿河臺二ノ五

保科清春

東京都千代田區九段二ノ一

株式會社 生活社

東京都千代田區神田駿河臺二ノ五

電話 神田二二八三

會員番號 A 一一九〇五四

日本出版配給株式會社

東京都千代田區神田淡路町二ノ九

序

日本の敍事文藝に關する研究を一冊にまとめて置かうと思ひ、この書を成した。卷頭の「日本敍事文藝の展開」は、概説風に書いた原稿「日本文藝の三潮流」の一部分で、戦災に罹つて幸に焼失を免れたものである。その詳しい事情はこの稿の初めの所に書いて置いた。「源氏物語の美」「歌物語における短歌の位置」「文藝としての謡曲」「幸田露伴の運命觀」「永井荷風論」は、それぞれ「解釋と鑑賞」「八雲」「能」「藝林間歩」「群星」に寄せた原稿で、日本敍事文藝に關する特殊研究である。謡曲は劇の方に入るべきものであるが、敍事的要素もあるので此處に收めた。「日本文藝における近代性」「新日本文藝の様式」は、それぞれ「國民の歴史」「藝術」に寄せたもので、日本文藝の諸様式に觸れてはゐるが、敍事文藝に關聯するところが深いので、これも採録した。

すべてこれらは自身の新しい研究成果を世に問はうとしたものではなく、啓蒙のために

書いたり、依頼された題で執筆したりしたものであるが、讀者にとつては却つてこのやうなものも役に立つ所があるであらうと思ふ。

昭和二十三年五月

岡 崎 義 恵

目次

序	1
日本敘事文藝の展開	3
源氏物語の美	141
歌物語における短歌の位置	166
文藝としての謡曲	184
幸田露伴の運命觀	191
永井荷風論	234
日本文藝における近代性	242
新日本文藝の様式	262

敘事文藝の潮流

日本敘事文藝の展開

序

大正十二年四月、關東大震災の年、私は東北帝國大學法文學部の開設に當つて、仙臺に赴任し、「日本文學の主潮」といふ題で講義をはじめた。その草稿は久しく筐底に埋もれてゐたが、その後學生のノートを見た先輩から稱讚の辭を得たことなどを傳へ聞き、いつかはこれを公にする機會のあることを期してゐた。しかし私はその後日本文藝學の樹立に専念するやうになり、この舊稿は放擲されたまま二十年を経過した。

ところが戰爭中書肆の懇望によつて、小講座風の叢書の形で、これまでの講義を連續的

に公刊する案を立て、その第一冊として右の「日本文學の主潮」をも入れる計畫であつた。それで新しくその内容を整備し、多くの改訂や書増しをも施して、ほぼその稿は成つた。しかしノートを寫してもらつて、それに手を入れたので、淨書の必要もあり、また戦は次第に危急に向つたので、複本を作つて置かなければならなかつた。そこでその筆寫を朝下忠君に依頼し、半ば出來上つてゐた。その時戦火は仙臺を襲つて、私の手許にあつた原稿は盡く焼失し、ただ朝下君の許にあつた部分のみが、焼失を免れることが出來た。この原稿は「日本文藝の三潮流」といふ題に改め、次に記すやうな目次であつたが、その中、序論と第一章の一部分は再び講義を行つたので、そのノートが學生の手に残つてゐるかと思ふ。第二章は朝下君の許で完全に保存され、第三章は全く形をとどめなくなつた。

日本文藝の三潮流

序論 日本文藝とその流動

一 文藝の意味

二 美の本質

- 三 藝術意志の發現としての文藝
- 四 二三の文藝論に對する批判
- 五 文藝の様式と日本文藝
- 六 日本文藝の時代的波動
- 七 日本文藝の三潮流

第一章 抒情文藝の潮流

- 一 記紀時代の歌謠と祝詞・宣命
- 二 萬葉風
- 三 平安時代の和歌と抒情的散文
- 四 新古今風
- 五 中世の和歌・連歌と抒情的散文
- 六 蕉風の成立
- 七 俳諧の展開
- 八 近世和歌

九 謡物の流と抒情文藝の回顧

十 明治以後の長詩・短歌・俳句

第二章 敘事文藝の潮流（本書に收載。以下括弧内の數字は本書の頁數。）

一 神話・傳説（二七）

二 作り物語の成立（三七）

三 源氏物語とその末流（四三）

四 日記・隨筆と歴史物語（五二）

五 戰記物語（六六）

六 中世敘事文藝と近世敘事文藝の發生（七八）

七 西鶴の浮世草子（八三）

八 西鶴以後の寫實小説（九五）

九 江戸後期の傳奇小説（一〇三）

十 敘事文藝の回顧（一二四）

十一 明治の小説と自然主義の成立（一二九）

十二 大正・昭和の小説と理想主義の展開（二三）

第三章 劇文藝の潮流

- 一 古代劇文藝の發生
- 二 謡曲
- 三 狂言
- 四 近世劇文藝の發生
- 五 近松の世話淨瑠璃
- 六 近松以後の淨瑠璃
- 七 歌舞伎
- 八 明治以後の戯曲・脚本

後記

幸ひに焼失を免れた「敍事文藝の潮流」だけを此度上梓することになり、末尾に戦後の

情勢を一二枚書き加へ、この序を附した。焼失した部分もいつか新たに稿を起し、全部の原形を回復する日があるかも知れないが、さしあたりこの斷片を世に出して置きたいと思ふ。原稿のままで置けばこれさへも喪失する日がないとも限らないのである。

この稿は元來學生に講義する爲の啓蒙的な概説で、何等新しい研究を以て世に問はうとするものではない。戦争中個人講座の如き企てを起したのも、高等學校の學生の參考書といふ程度の目的を持つものであつた。しかしこの種の概説も讀む人によつては益がないこともないと思ふ。

それに今一つこの稿を企てた理由があることを告げて置きたい。それはこの文藝史風の敘述が日本文藝の全貌を、抒情・敘事・劇の三形態のそれぞれの流動によつて構圖してあることである。文藝のこの三形態はギリシヤ以來認められてゐるもので、いはば世界的なものであるとも云へるが、これを日本の文藝にあてはめて文藝の展開を論じたものは、私の知る限り殆どないと云つてもよい。土居光知氏その他これに近い方法を採つてゐる人は二三あるが、純粹にこの三形態で統一してゐるのではない。日本文藝をこの三形態で割り切るのは、實際多くの無理があり、私は今ではこれをさう重く見得ないが、このやうな試

みもあつてよいとは思ふのである。

日本文藝を抒情・敘事・劇の三潮流の流動としてみると、どのやうな構圖が試みられるであらうか。今それを概観して置きたい。

まづ抒情文藝の潮流は、抒情詩を中心としたもので、今日では一般に詩歌と呼ばれるものである。これは作者の主觀的感情の表現であつて、その爲に多くは律語とか韻文とか、特殊の感動力のある形式をとる。さうして現在進行の形態で表現されるのが常である。このやうな特殊の表現を必要とするのは、内容に基づく所があるのであつて、感情・情緒・情操・感覺印象・情調等は主觀的・流動的で、無形の精神であり、今動いてゐる姿において捉へられるものであり、その姿は律動的である。これは音楽と結合して歌はれることも多く、その本質は音楽的なものといふべきである。

抒情文藝の發生時代は大概歌はれたものである。日本では記紀に歌謠として採用されてゐるものが、その原型であるが、最初は民謡風のものから出たであらう。古典時代に入つて宮廷を中心とする藝術詩が發達し、「萬葉」「古今」以下多くの勅撰集や家集の出現となつたが、中世以後連歌が派生し、近世に入つてそれが民衆化して俳諧になつた。明治以後

西洋の詩の影響で長詩が行はれるやうになつたが、傳統的な短詩形もそれに刺戟されて、新しく復興してゐる。この外に原始時代の民謡の流は古代には神樂歌・催馬樂・今様などといふ謠物になり、中世以後は小唄・俗曲の類が多く作られたが、これは今日では唱歌や諸種の歌謠となつてゐる。謠物は文藝の獨立と共に傍流となる運命を免れなかつた。

敘事文藝は初め神話・傳説から生れ、敘事的形態が整つて、物語・小説その他種々の説話となり、今日に至つてゐる。はじめは律語・韻文で表現されることも多いが、元來歌はれるものよりも語られる性質のものであるから、本質上散文となるべき運命を持つてゐる。今日では何處の國でも散文藝術となつて來た。その理由は内容が客觀的な外界の事件であり、従つて觀察・想像・記憶といふやうな永續的で複雑な知的作用によつて構成されるものだからである。しかし知性的とはいへ、概念的思索に深入りして抽象的な哲學・科學の領域までは進まないものであつて、やはり知識の具體的な範圍にとどまり、そこに形象を生命とする藝術としての使命を守つてゐるものである。ただ詩歌のやうに主觀的感情を直接に表現する途を避け、内部・外部の出來事をすべて過去の事件として靜かに觀照し敘述する所に特色を持つてゐる。

日本では記紀の説話にはじまり、元は語部の傳誦によつて、多少曲節や抑揚を附けて語られたものらしい。しかし十分な律語の形をなさず、はじめから散文的であつた。その後一方に正式の歴史を導き出すが、敘事文藝の本流は宮廷を中心とする物語及び物語的日記といふやうな形で、古典時代の女流の手に發達を遂げた。中世に入つて第二の傳説時代ともいふべき時期に入り、軍記物が作られ、更に中世末から近世初にかけてお伽草子・假名草子・浮世草子の新様式が生れ、近世後期には町人の讀物として洒落本・人情本・讀本・合卷などといふ諸種の小説が續出した。この近世小説は多く遊里を中心とするものであつたが、現代になつて西洋近代小説の影響による短篇・中篇・長篇の創作が知識階級の中から生れた。この分量のほゞ一定したのは、やはり明治以後のことである。一方歴史物はそのまま今日まで傳はつてゐたが、歴史は今や純粹な科學的產物にならうとし、文藝の潮流から逸出すると思はれる。しかし嘗て軍記物から通俗的な浪義物や講談の類に墮したのと反對に、鷗外の史傳のごとく歴史をそのまま高級な藝術に引上げ、科學と藝術との結合を遂げようとする傾向もあらはれた。

劇文藝の潮流は演劇の基本として存するものである。ギリシャでは抒情詩・敘事詩と並